

# 考古かながわ

第27号

2003年8月29日

## 織笠さんを偲ぶ

白石浩之

かながわ考古学財団の中田英さんから織笠さんが亡くなった一報をいただいた。その時ほど自分の耳を疑ったことはなかった。まさか織笠君が50歳で亡くなるなんて、あまりにも早すぎる。こよなく先土器と映画（もちろんいうまでもなく、それ以上に奥さん）を愛し、先土器時代の講演で黄色いハンカチの実演までしてしまう。そしてある時は、泣いてしまいますよと言いながら涙を流しながら自らの主張を訴える。また納得いかない場合のくせか、繰り返したバコを口元に寄せては離したりするしぐさ。そして酒を飲んで古典的なうたを歌い、それが終わるとその場で寝てしまうという愛嬌のある織笠さんが・・・。

実は織笠さんが亡くなる一週間前、九州福岡県で長崎県の下川達彌さんと佐賀の森醇一朗さんが県を退職し、大学に勤務するとのことで、記念のパーティの集いがありました。織笠御夫妻も元気に参加しておられた直後だけに、その驚きは言葉では言い表せないほどのものでした。お通夜の前の日とにかく早く織笠さんに会ねばと新幹線に飛び乗りました。走馬灯のように彼への思いを馳せながらいつもより遅く感じた新幹線にいらだった。織笠さんと対面した時は、髭を剃っていたのでいつもより若々しく見え、今にも起き上がってくるような感じがして、とても亡くなったようには見えませんでした。



2002年秋 研究室にて

織笠さんは荒井幹夫、実川順一、田中英司さん等の後輩でした。小田静夫さんが一時武南学園で教鞭をとられていた頃の教え子でしたが、小田さんが麻生優先生のご指導を受けていたことから、彼らも自然と加わったというのが機縁でして、ちょうど神奈川県川崎市十三菩提遺跡の発掘調査に見学にこられたのが初対面だったと記憶しています。それ以後発掘者談話会や石器文化研究会そして神奈川県考古学会などで接する機会がますます多くなりました。発掘者談話会では私も織笠さんも生涯二度と経験できないような膨大な細石器や最古

級の豆粒文土器を出土した長崎県泉福寺洞穴に参加し、最も有望視されていた第三洞（7・8トレンチ）内の主としてやせた身体ではあったものの夏の炎天下なにするものぞ、といわんばかりに元気に参加していました。毎夏の8月の発掘調査に向けて、発掘区の責任者が昨年までの進捗状況、発掘成果と今年の調査予定についてガリ版刷りのパンフを作成して発掘に臨むことになっていましたが、泉福寺洞穴の発掘調査も年次を重ねるうちに、織笠さんも学生らを束ねる実質的なリーダーになっていきました。

神奈川考古同人会が主催したナイフ形石器文化終末期のシンポジウムでは織笠御夫妻がはじめてパネラーになりました。現京都大学の山中一郎氏や共立女子短期大学の竹岡俊樹氏等とナイフ形石器や切出形石器の定義について真正面から考え方が対峙した場面も、彼にしてみれば若き日の良き思い出として残っていたものと思います。そしてそのシンポジウムを契機としてその継続性を痛感し、安蒜政雄氏と白石が中心となって石器文化研究会が結成され、軌道に乗ってきたということで、次代を担う織笠さんに代表を引き継ぎました。彼の代では「A T降灰以前の石器文化」をテーマとして、月一回の研究会や数度のシンポジウムを開催し、大いに石器文化研究会に貢献し、組織を磐石なものにしました。そして神奈川県考古学会では設立当初から一緒に関わって、東海大学に事務局を置いて、彼が会計担当という最も面倒な役割を一手に引受けていました。

藤村新一による捏造問題によって彼の先土器時代説は大いに拍車がかかりました。南関東地方における最古級石器群の再検討から今まで後期旧石器の最も古い石器群を中期旧石器時代最末期としたらどうかという私の提案に対して、織笠さんは先土器時代説の立場から厳しく批判されました。思えば彼とは批判やそれに対する反批判が相互に行われることが何回かありましたが、今にしてみ

れば良き思い出であり、今後このような辛口の批判を生涯聞けないと思うと、まことに寂しいものがあります。

印刷された真新しい雑誌「石器に学ぶ」6号が彼の枕もとに添えられていました。実は2ヶ月前に彼と新宿で飲んだ時に、私が史学雑誌の回顧と展望で、「石器に学ぶ」の論稿を多く評価したからと言いましたら、彼は本当にうれしそうな顔をしていたのが印象的でした。今日石器そのものを重視せず、理論考古学が流行するおかしな動向をきちんとおさえて、せめて自分の教え子には石器そのものの観察を軽視してはいけません。そんな危機感からの誌名だったのでしょう。1点の石器の観察がいかに重要であるかを悟らせるためだったのでしょう。晩年の捏造問題もまさに石器軽視の現われでもあり、織笠さんの予見が的中していたといってもよいかもかもしれません。この問題を契機として織笠さんは旧石器時代の呼称に大いに憂い、高らかに先土器時代の復活を叫んで旅立ってしまいました。日本旧石器学会もこれから織笠さんに役員として活躍してもらおうと思っていた矢先でした。本当によき相談相手として、そして先土器研究でのよきライバルであった織笠さんが突然にいなくなって私もなにか心に大きな穴がぽっかりあいてしまいました。

このたびのご不幸に対して奥さんにどのようなおなぐさみの言葉をかけていかどうかわかりません。今言えることは織笠さんあるいは御夫妻で考えてきた問題点を少しでも大成する目標をもって漸進していただくことを願っています。

会員の皆様の多くがご承知のように、神奈川県考古学会の設立当時から役員としてご活躍いただいております。東海大学教授の織笠 昭氏が5月21日お亡くなりになりました（享年50歳）。掲載させていただきました写真は、奥様の明子さんよりお借りしました。お礼申し上げますと共に、心より昭氏のご冥福をお祈りいたします。

（編集子）

## 2003年度総会を開催

さる6月7日(土)、かながわ県民センターにおいて2003年度神奈川県考古学会の総会を開催しました。ここに総会の内容を報告します。会則に則り、寺田会長を議長に選出した後、以下の議事が総会に諮られました。

- 議事1 2002年度事業報告
- 議事2 2002年度収支決算報告
- 議事3 会長・副会長の選出
- 議事4 幹事及び監事の選出
- 議事5 2003年度事業計画案
- 議事6 2003年度収支予算案

### 議事1 2002年度事業報告

(総会) 総会を2002年6月3日、かながわ県民センターにて開催。

(役員会・幹事会) 5月15日、7月17日、9月18日、10月16日、1月15日、3月19日の合計6回開催。

(会誌) 『考古論叢神奈河』第11集を2003年4月に刊行。論文6本と2000年度考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」のコメント集を掲載。

(連絡誌) 『考古かながわ』24号、25号、26号をそれぞれ8月、12月、3月に刊行。

(講座) 2003年3月23日、県民センターにて「学史を語る」と題して開催。参加者は約130名。

(見学会) 県内における発掘調査現場の見学会として鎌倉市仏法寺跡(9月14日)、鎌倉市若宮大路周辺遺跡群(2月2日)、また県外への1泊バス旅行として宮城県奥松島の貝塚の見学会を開催(10月19・20日)。

(発表会) 第26回神奈川県遺跡調査・研究発表会を11月24日に横須賀市教育委員会、横須賀考古学会との三者共催により横須賀市文化会館で開催。川上久夫さんによる講演「赤星直忠—偲ばれる研究者の姿正」が行われる。

### 議事2 2002年度収支決算報告

別紙のとおり、2002年度の収支決算が報告され、監事からの会計監査報告が拍手をもって承認されました。

### 議事3 会長・副会長の選出及び議事4 幹事及び監事の選出

2002年度をもって会長以下の役員が2年間の任期満了となるため、今年度の総会に2003・2004年度の会務遂行を担当する役員の変更が行われました。この結果、寺田兼方会長、伊東秀吉副会長、市川規平監事、伊藤郭監事がそれぞれ再任されました。また幹事(役員)は会則の規定により10人が任期満了で退任し、新たに再任21名(うち3名は復帰による元役員)、新任7名の合計28名の役員が総会の承認により選任されました。

### 議事5 2003年度事業計画案

(総会) 総会は2003年6月7日、かながわ県民センターにて開催。

(役員会・幹事会) 6月11日以降、おおむね2ヶ月に1回の間隔で年6回程度の開催を予定。

(会誌) 『考古論叢神奈河』第12集を2004年4月に刊行予定。

(連絡誌) 『考古かながわ』27号、28号、29号として年3回の刊行を予定。

(講座) 2004年3月7日、県民センターにて開催を予定。テーマ未定。

(見学会) 例年どおり県内2回、県外1回の合計3回の見学会を開催予定。

(発表会) 第27回神奈川県遺跡調査・研究発表会を10月19日に横浜市の開港記念会館で開催予定。

### 議事6 2003年度収支予算案

別紙のとおり、上記の事業計画案とともに2003年度の収支予算案が審議され、満場一致で拍手により承認されました。

## かながわ考古トピックス2003の開催

総会の議事終了後、毎年恒例となったかながわ考古トピックス2003が開催され、以下のとおり4名の講師による興味深いお話がありました。

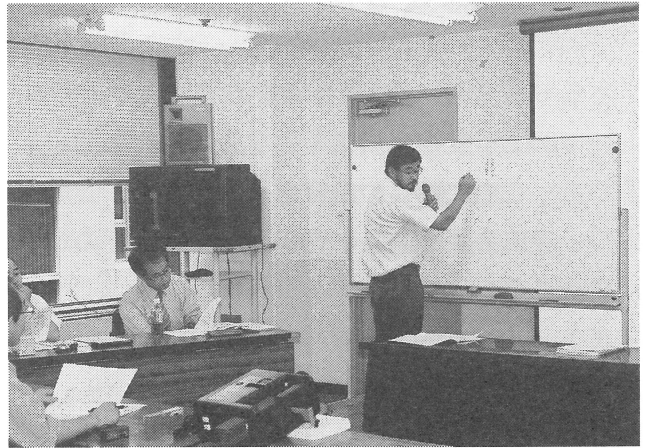
弥生・古墳時代……伊丹徹さん

古代……大村浩司さん

中世……田代郁夫さん

近代……野内秀明さん

特に考古トピックスにおいて近代の遺跡を扱うのは初めての試みでありましたが、横須賀市の猿島についての調査報告は画期的な調査事例として会場の関心を集めることとなりました。



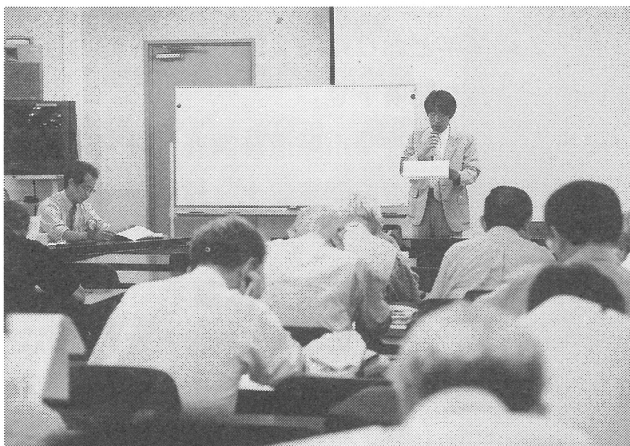
考古トピック田代氏



考古トピック野内氏



考古トピック伊丹氏



考古トピック大村氏

今年度も会員の皆様のご期待に応えられるよう、役員一同、努力して会務の遂行に邁進する所存ですので、会員の皆様からのご支援、よろしく願いいたします。  
(総務担当役員 小林康幸)

### 原稿の募集

『考古論叢神奈河』はみなさんで育てる会誌です。

考古学会に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが、身近にある資料の紹介や研究ノートも気軽に投稿して下さい。

第12集の締切りは、平成15年12月末日を予定しています。ふるっての投稿をお待ちしています。

編集委員 加藤緑・小滝勉・佐々木健策・依田亮一

問い合わせ先 依田亮一 TEL.0463-51-5108

## 2002年度収支決算書

(収入の部)

| 節        | 予算額       | 決算額       | 比較増減額    | 説 | 明   |
|----------|-----------|-----------|----------|---|---|
| 会費       | 1,302,000 | 1,260,000 | ▲ 42,000 |   | 旧年度会費 3,000×54名=162,000<br>本年度会費 3,000×306名=918,000<br>次年度会費 3,000×60名=180,000  |
| 機関誌等売り上げ | 1,263,080 | 1,101,460 | ▲161,620 |   | 発表会要旨<br>(内訳) 21回要旨(会員) 500×2部=1,000<br>22回要旨(会員) 700×3部=2,100<br>24回要旨(会員) 800×4部=3,200<br>24回要旨(一般) 1,500×1部=1,500<br>26回要旨(会員) 500×84部=42,000<br>26回要旨(一般) 1,000×74部=74,000  |
|          |           |           |          |   | 考古論叢<br>(内訳) 論叢1(会員) 1,800×3部=5,400<br>論叢1(一般) 2,300×4部=9,200<br>論叢1(委託) 1,840×2部=3,680<br>論叢2(一般) 2,300×2部=4,600<br>論叢2(委託) 1,840×2部=3,680<br>論叢3(一般) 2,500×1部=2,500<br>論叢3(委託) 2,000×4部=8,000<br>論叢4(会員) 1,800×1部=1,800<br>論叢4(一般) 2,500×1部=2,500<br>論叢4(委託) 2,000×4部=8,000<br>論叢5(会員) 1,800×3部=5,400<br>論叢5(一般) 2,500×2部=5,000<br>論叢5(委託) 2,000×4部=8,000<br>論叢6(会員) 1,500×3部=4,500<br>論叢6(一般) 2,500×2部=5,000<br>論叢6(委託) 2,000×2部=4,000<br>論叢7(会員) 1,500×4部=6,000<br>論叢7(一般) 2,500×4部=10,000<br>論叢7(委託) 2,000×10部=20,000<br>論叢8(会員) 1,500×5部=7,500<br>論叢8(一般) 2,500×3部=7,500<br>論叢8(委託) 2,000×11部=22,000<br>論叢9(会員) 1,500×11部=16,500<br>論叢9(一般) 2,500×16部=40,000<br>論叢9(委託) 2,000×26部=52,000<br>論叢10(会員) 1,500×49部=73,500<br>論叢10(一般) 2,500×42部=105,000<br>論叢10(委託) 2,000×55部=110,000 |
|          |           |           |          |   | 講座要旨<br>(内訳) 講座古代集落(会員) 700×1部=700<br>講座古代集落(一般) 1,000×1部=1,000<br>講座縄文起源II(会員) 700×4部=2,800<br>講座縄文起源II(一般) 1,000×6部=6,000<br>講座弥生(会員) 700×1部=700<br>講座弥生(一般) 1,000×5部=5,000<br>講座古墳(一般) 1,000×2部=2,000<br>講座縄文ムラ(会員) 800×3部=2,400<br>講座縄文ムラ(一般) 1,000×2部=2,000<br>講座縄文ムラ(委託) 800×1部=800<br>講座寺院(会員) 500×5部=2,500<br>講座寺院(一般) 1,500×6部=9,000<br>講座寺院成果(会員) 500×4部=2,000<br>講座寺院成果(一般) 1,500×8部=12,000<br>講座寺院成果(委託) 1,200×37部=44,400<br>講座旧石器(会員) 800×12部=9,600<br>講座旧石器(一般) 1,500×19部=28,500<br>講座旧石器(委託) 1,200×20部=24,000<br>講座中世(会員) 500×13部=6,500<br>講座中世(一般) 1,500×63部=94,500<br>講座中世(委託) 1,200×50部=60,000<br>講座学史(会員) 500×84部=42,000<br>講座学史(一般) 1,500×45部=67,500  |
|          |           |           |          |   | トピックス<br>(内訳) トピックス2000(会員) 100×4部=400<br>トピックス2000(一般) 100×1部=100<br>トピックス2002 100×1部=100  |
| 雑収入      | 194,355   | 634,646   | 440,291  |   | 見学会参加費等(625,050)/預金利子/懇親会残り/他 634,646   |
| 繰越金      | 2,095,565 | 2,095,565 | 0        |   | 前年度繰越金 2,095,565  |
| 合計       | 4,855,000 | 5,091,671 | 236,671  |   |   |

(支出の部)

| 節    | 予算額       | 決算額       | 比較増減額      | 説 | 明   |
|------|-----------|-----------|------------|---|---|
| 事務局費 | 605,000   | 376,130   | ▲ 228,870  |   | 連絡費 307,704<br>会議費 14,880<br>行事開催費 24,642<br>賃金 9,960<br>会費振込手数料 18,944 |
| 会誌費  | 1,005,000 | 1,341,650 | 336,650    |   | 連絡費 3,900<br>印刷費 1,317,750<br>謝礼 20,000                                 |
| 連絡誌費 | 150,000   | 123,335   | ▲ 26,665   |   | 連絡費 3,950<br>印刷費 119,385  |
| 発表会費 | 655,000   | 469,920   | ▲ 185,080  |   | 連絡費 52,670<br>行事開催費 144,750<br>印刷費 262,500<br>謝礼 10,000                 |
| 講座費  | 625,000   | 503,567   | ▲ 121,433  |   | 連絡費 6,980<br>会議費 2,280<br>行事開催費 48,057<br>印刷費 446,250                   |
| 見学会費 | 280,000   | 705,980   | 425,980    |   | 連絡費 49,024<br>会議費 2,270<br>行事開催費 634,686<br>謝礼 20,000                   |
| 予備費  | 1,535,000 | 0         | ▲1,535,000 |   |   |
| 合計   | 4,855,000 | 3,520,582 | ▲1,334,418 |   |   |

\*収入(5,091,671円)-支出(3,520,582円)=次年度繰越金(1,571,089円)

会計監査報告

2002年度の収支決算について、金銭出納簿、証拠書類等を精査し、預金残高と照会した結果、誤りなく適正に処理されていることを確認しました。

2003年5月30日

監事 市川規平 ㊟  
伊藤 郭 ㊟

## 2003年度収支予算案

(収入の部)

| 節        | 予算額       | 前年度予算額    | 比較増減額      | 説 | 明                       |
|----------|-----------|-----------|------------|---|-------------------------|
| 会費       | 1,119,000 | 1,302,000 | ▲ 183,000  |   | 会費 3,000×373名=1,119,000 |
| 機関誌等売り上げ | 1,101,460 | 1,263,080 | ▲ 161,620  |   | 発表会要旨・考古論叢・講座要旨等売り上げ    |
| 雑収入      | 10,000    | 194,355   | ▲ 184,355  |   | 見学会参加費/預金利子/懇親会残り/他     |
| 繰越金      | 1,571,089 | 2,095,565 | ▲ 524,476  |   | 前年度繰越金                  |
| 合計       | 3,801,549 | 4,855,000 | ▲1,053,451 |   |                         |

(支出の部)

| 節    | 予算額       | 前年度予算額    | 比較増減額      | 説 | 明   | 備考                     |
|------|-----------|-----------|------------|---|---|------------------------|
| 事務局費 | 360,000   | 605,000   | ▲ 245,000  |   | 連絡費 296,000<br>会議費 16,000<br>行事開催費 24,000<br>賃金 5,000<br>会費振込手数料 19,000 | 連絡誌の発送費を含める            |
| 会誌費  | 935,000   | 1,005,000 | ▲ 70,000   |   | 連絡費 10,000<br>会議費 5,000<br>印刷費 900,000<br>謝礼 20,000                     |                        |
| 連絡誌費 | 130,500   | 150,000   | ▲ 19,500   |   | 連絡費 4,500<br>会議費 1,000<br>印刷費 125,000                                   |                        |
| 発表会費 | 468,000   | 655,000   | ▲ 187,000  |   | 連絡費 50,000<br>会議費 1,000<br>行事開催費 127,000<br>印刷費 280,000<br>謝礼 10,000    |                        |
| 講座費  | 495,000   | 625,000   | ▲ 130,000  |   | 連絡費 5,000<br>会議費 5,000<br>行事開催費 100,000<br>印刷費 350,000<br>謝礼 35,000     |                        |
| 見学会費 | 90,000    | 280,000   | ▲ 190,000  |   | 連絡費 55,000<br>会議費 2,000<br>行事開催費 18,000<br>謝礼 15,000                    | 参加費を徴収する僅しについては予算計上しない |
| 予備費  | 1,323,049 | 1,535,000 | ▲ 211,951  |   |   |                        |
| 合計   | 3,801,549 | 4,855,000 | ▲1,053,451 |   |   |                        |

## 情報

「国指定史跡 川尻石器時代遺跡見学会」

日程：2003年9月6日(土)10時～15時

9月7日(日)13時～15時 ※雨天中止

場所：城山町谷ヶ原2丁目地内(谷ヶ原浄水場東隣)

問い合わせ：042-782-1111

「なりわい—生産と道具—」

会期：2003年9月13日(土)～11月30日(日)

会場：川崎市市民ミュージアム・特別資料室

問い合わせ：044-754-4500

「かながわの遺跡展」

会期：2003年10月1日(水)～31日(金)

会場：神奈川県立埋蔵文化財センター 3階展示室

問い合わせ：045-252-8661

第3回 古墳フェスタ

開催日：10月18日(土)・19日(日)

会場：秦野市立桜土手古墳公園・展示館

問い合わせ：0463-87-5542

「丹沢を仰ぐ縄文遺跡～後・晩期の隆盛～」

会期：11月1日(火)～12月13日(土)

会場：秦野市立桜土手古墳展示館

問い合わせ：0463-87-5542

(財)かながわ考古学財団発掘調査成果発表会・公開セミナー

「高座郡衙(郡家)の世界」

日程：2003年11月9日(日)10時～16時25分

会場：茅ヶ崎市コミュニティーセンター 茅ヶ崎市役所分庁舎6F

問い合わせ：045-252-8661

## 鎌倉市内発掘調査見学会

松尾 宣方

見学地はJR鎌倉駅西口正面に位置し、若宮大路周辺遺跡群と呼ばれる広大な遺跡の一角である。この辺りは、天平五年（733年）銘の木簡が出土した鎌倉郡衙跡や、中世武家屋敷とその門前の庶民居住地とが併せて発見された今小路西遺跡を始め、主に8世紀代の古代遺構と13世紀前半から15世紀前半期の多彩な中世遺構とが混在する遺跡地として知られたところである。

調査は、齋木秀雄さん（鎌倉考古学研究所所長）を団長とする調査団により、昨年11月25日から本年3月17日まで、約1,000m<sup>2</sup>の用地を対象にして行なわれた。

調査地には、嘗て映画館が建っていて、私にとっては中学生の頃に石原裕次郎から感動を受けた人生のモニュメント地点でもあったが、現在は調査も終わりマンション建設工事が進行中である。

見学会当日は小雪が舞うかのような寒天であったが、同日来訪された茨城県の阿久津久氏一行も含めて約100名の方々が参集する、近来にない盛大な見学会となった。そのためか、齋木さんも熱が入り、予定時間をオーバーするほど懇切丁寧に、古墳時代後期の竪穴住居址や奈良時代の掘立柱建物跡、そして鎌倉～南北朝期の方形竪穴建物跡・井戸・道路など諸遺構の説明をして頂いた。説明の後、各遺構を間近に観察するべく現場内の周回コースを辿って一巡したが、多くの方が中世の半地下式建物である方形竪穴の構造と井戸の数の多さ（最終確認数28基）に関心を示されてい

たように見受けられた。また、古代の建物跡が思ったよりも少ないという感想が何人もの会員の方から寄せられ、古代遺構を期待して参加された方々が多くおられたことが判明した。これはどうも私が発送した案内状の文中にある『…所々には8世紀の柱穴が顔を覗かせている鎌倉ならではの遺跡です。』の一節がやや誇大な表現であったが故かと、冷汗をかきながら「中世鎌倉の都市開発によって古代建物跡の多くが壊されたので、残っていないのしょう。」と弁明に努めたのである。実際に遺構の重複状況から推してその通りではあるが、記録保存のための緊急発掘調査が絶え間なく続く現況は、この事象が現在でも同じように繰り返されていることの証であろう。

遺構説明の後は、舶載陶磁器、国産陶磁器を始め刀子、六器などの金属製品や漆器碗・皿、折敷、杓文字などの木製品等々の出土遺物を、調査員諸氏の説明を受けながら実見して今回の見学会は無事に終了した。

なお、見学会担当役員在任中には県内各地は元より県外、国外の見学会を会員皆様のお力添えにより実施できたこと、改めて感謝申し上げる次第である。 (2003年2月2日実施)



田代昭夫氏撮影

# 考古学講座『学史を語る』の成果

岡本孝之

1

学史で人を呼べるかという反対意見があった。講座の題として適切かと不安があった。にもかかわらず他の題材をあげる人がいなかった。題名決定までには時間がかかったが、日程も迫ってきてするしかなく、担当の大坪部会長には大変な苦勞をかけることになった。大坪氏の考えた副題の「学史を踏まえた最新の研究」には含みがあった。

考古学講座の基本的なスタンスとして、入門講座か、考古学講座かということは毎回議論されることである。「入門」の字は案内文にはあったが、当日資料から消えた。入門的なやさしさも必要条件として大事だが、考古学会としての最新の成果をだせること、研究者が楽しめる（考える）事業であることはもっと大事にしたい。

今回の講座の焦点は拡散していた。学史か、最新の研究か。学史は神奈川県内か、時代史全般か。それは講演を引き受けていただいた諸氏の判断に任せ、結果として次のように区分された。

|          |                   |
|----------|-------------------|
| 学史 神奈川県内 | 岡本、鈴木、中村<br>富永・依田 |
| 時代の研究史   | 戸田、小宮、渡辺          |
| 地域史      | 立花                |
| 最新の研究    | 立花、渡辺             |

学史への取組み方は多種多様であることを露呈した。これは神奈川県における学史研究のための初めてのシンポジウムである故である。しかし、終了後には学史の講座を連続的に開催すべきという意見が出た。

2

鈴木次郎さんには、自身の相模考古学研究会の調査研究について思い出をこめて語っていただいた。当日配布された大和市の月見野遺跡群のパン



フレットには若き鈴木さんの写真が掲載されていて、会場に紹介することができた。

中村さんによる神奈川県内の貝塚研究史は初めてではないかと指摘を受けた。酒詰仲男氏の「貝塚に学ぶ」姿勢を継承して県内の貝塚を再発見しようと会を組織して取り組んでいるその成果はいずれこの講座でも披露されるはずである。私としてはとりわけ若林勝邦氏の評価においてうれしい感想を持った。

富永さんと依田さんによる古代の寺院跡と官衙跡などのまとめは、私の仕事を進めることに力を注入された思いであった。本会で開催した『かながわの古代寺院』は神奈川県考古学史の大きな飛躍であったと自負したい。

戸田さんによる縄文土器考古学の研究の主流をなした山内清男氏の評価はいつもながら思い入れの深いものがある。懇親会ではさらに盛り上がった。小宮さんによる弥生時代の環濠集落の研究史は、小宮さんが推進してきた鶴見川流域の総決算ともいえるものであった。

地域史の重要性もある。立花さんの発表は伊勢原市内の調査をまとめたものであったが、1900年の坪井正五郎氏の三ノ宮での発掘は、私の作成した年表にもないように神奈川県内の考古学史に正當に位置づけられていない。永井健之輔（1868～1941）、永井参治（1903～1976）親子については立花さんから生没年について教示を得た。さらに、

人類学雑誌を調べ、坪井氏がケルン、積石塚として議論していることを知った。この積石塚としての理解は以後しばらくは県内でも引き継がれたようであるが、最近ではそのように理解する人はいないこともあって、坪井氏の学史的評価はされてこなかったようだ。永井氏は厚木の林晁氏（三中教師）とも親交があったようだ。

渡辺さんの板碑研究史は、服部清道氏について触れてもらい、考古学史上の位置づけを確認しようと思図したものであったが、その延長上にある渡辺さん自身の板碑論を展開して興味をひろげることができた。

考古学の歴史について学ぶという試みは、成功したのではないか。ジャンルとして確立したと認識したい。

### 3

開催後、相模原市の大貫氏から青木純造氏（1860～1922）について教示された。『城山町史』に詳しく紹介されている。原義範氏についても教えていただいた。

最初期の人類学会員としてあげた石橋絢彦氏は、横浜の近代遺産、横浜港内防波堤（北水堤）の設計者であった。葉山町で亡くなっている。小林與三郎氏に紹介されて人類学会員となった原田巳之助氏、村松久太郎氏はマンロー氏、ベルツ氏と関係している。小林氏とマンロー氏がつながった。

考古学史だけでなく近代の考古学を目指したく、新設の横浜市都市発展記念館を見学したところ、中川直亮氏（1880～1958）の名をみかけた。教育課長とあり震災後の復興に功績があった人として紹介されており、学芸員氏からよこれき双書『横浜に震災記念館があった』1995の中島信一氏による「中川直亮のこと」のコピーを戴いた。横浜商業専修学校長、横浜女子専修学校長に1929年になり約7年間その職にあったという。著作に『鶴見総持寺裏先住民族遺跡』があり、これは1938年の史前学雑誌の文と一致するものと思われる。中川

氏は大山史前学会の最初からの会員であり、荒立貝塚の調査は酒詰氏と芹沢氏の調査に引き継がれている。

また、『川崎市稿』をまとめた山田蔵太郎氏（1868～1931）については、追悼文と遺稿集があることを知った。横浜考古学研究会の清水裕氏にも鶴見区の『郷土研究とよおか』（1992復刻）があることを知った。鶴見神社にあったという謄写刷を復刻したものである。日々発見が続く。

### 4

近代の考古学の勉強と、考古学史の探索は密接に関連していることを、開催後4ヶ月を経て、さらに強く感じる。多くのご教示を得たことを改めて感謝申し上げると同時に、次なる『近代横浜の考古学』講座開催に向けて努力したい。

最後の小出義治先生のまとめは、驚かされたが後日思い出されたとのことであった。

また、立花さんや渡辺さんによる最新の研究発表があったということは、考古学会として研究発表会を開催することができるという見通しをもつことができたと評価したい。神奈川県考古学会研究大会も夢ではない。

### 編集後記

役員改選に伴い、連絡誌部会の役員も下記のように新たなメンバーになりました。これまで通り、どうぞよろしくお願いいたします。次号は、10月に開催される第27回遺跡調査・研究発表会の報告を中心にお届けする予定です。（秋・渡）

#### 考古かながわ 第27号

発行 神奈川県考古学会  
発行日 2003年8月29日  
編集者 秋田かな子・安藤文一・  
河野真知郎・渡辺 務  
印刷 (有)湘南グッド  
発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方  
〒251-0043  
藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102  
郵便振替 00240-9-71208